

ヤスクニ・レポ 243

「緊急事態宣言に思う」

柴田智悦 (日本同盟基督教団 横浜上野町教会牧師)

1. 緊急事態宣言発令

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた「改正新型コロナウイルス等対策特別措置法」に基づく「緊急事態宣言」が4月7日に7都道府県に対して出され、その後16日に全国に範囲を広げました。これによって各知事は、食料の買い出しなどを除いては外出しないよう住民に要請し、大学、遊興、商業、集会施設などの使用、イベント開催の停止を要請・指示し、従わない事業者を公表することに対しても法的裏付けを得たのです。また、外出自粛要請等、警察に必要な措置を講ずるよう求めることができます。ただし、あくまで都市封鎖(ロックダウン)ではなく、外出自粛や、社会機能維持のための事業継続の協力を「お願い」するものです。そして、緊急事態措置を実施する必要がなくなると認められれば速やかに解除するとしています。

ところで、あれほど憲法に緊急事態条項を入れることに執着していた安倍首相が、今回の緊急事態宣言を出すことには躊躇していたように見えます。地方自治体が独自で国よりも先に緊急事態宣言を出したほどでした。2月28日、北海道は早々に緊急事態宣言を出し、一時はウィルスの封じ込めに成功したかに見えたものの、3月19日に解除後、再び感染者が増えたため、結局4月16日の緊急事態宣言の対象となりました。つまり、都市封鎖(ロックダウン)は、感染の広がりは緩やかにできても押さえ込むことはできないということです。緊急事態宣言を出せば経済が混乱することは明らかでしたから、アベノミクスがとどめを刺されてしまうことを恐れたのでしょう。

ところが、専門家会議や医師会と言った市民の側からの要望により、政府が渋々、緊急事態宣言を出すというねじれ現象が生じてしまいました。主権者である国民が、自分たちの自由を制限する権利を政権に与えようとしたのです。本来であれば個人が判断し、公共の福祉ということを考えて自主的に行

動すべき問題です。安倍首相の要請により、全国の小中高校、特別支援学校が3月2日から臨時休校していますが、これも全国一律ではなく個々の学校、少なくとも市町村が判断すべきことでした。未来が不確定になりますと、不安に駆られた人々は強力なリーダーシップを求めますが、それは安心感を得ると同時に思考停止をもたらします。しかも私たちは、この宣言の解除を2年間、自由にできる権利まで安倍政権に与えてしまったのです。

この宣言に基づいて、ウィルスの感染経路を明らかにするためという理由で、中国や韓国のように、個人の生活を細かに追跡するシステムが確立するかもしれません。そして、宣言が解除された後でもそれは残され、新たな緊急事態と称される時に他の目的に転用されるでしょう。たとい、現在の計画以上の十分な補償が、外国人労働者や留学生、非正規雇用者、ホームレスやネットカフェ難民、DV避難者たちに至るまで行き渡ったとしても、それと引き換えに私たちの生活を監視させ、自由を制限させてしまうとしたら本末転倒です。

2. 価値観の変容

それにもかかわらず、今は感染拡大を防ぐことが善であり、感染拡大を助長するようなことは悪である、という絶対的判断基準ができあがってしまいました。もちろん、医療崩壊は避けるべきですし、死者を出さないように徹すべきです。しかし、ウィルスに感染しない・させない、という絶対的善のために、人権や個人の自由まで明け渡して良いのでしょうか。誰も反対できない「正論」は時に独裁者を生み出します。

さらに、教会の価値観すら変容しつつあります。教会にとっても、今最も大事なことは、感染拡大を防ぐ最大限の努力をすることで、三密を避けるために教会に集まって礼拝することすら悪とみなされ、証しになっていないと一蹴されかねません。どれだ

け対策しようと完全に管理できないのが感染症ですが、ちょうど良いインターネットツールが登場したこととあいまって結局は何もしないこと、つまり、各自が家で礼拝することが最も正しくなりつつあります。今は、何としてでも命を守るべきであって、不要不急の外出をしないこと、ネット環境がない家庭やスマホのない方は各自でお祈りすることが正しいのです。

しかし、私たちが教会に集まって礼拝することは不要不急のことではなく、必要火急のことです。そもそも教会とは集会の意味でした。そのことを踏まえた上で、やはり教会に来るまでの道程に危険を感じる方々やお年寄りがいれば家庭で礼拝を守るという方法もありうるでしょう。あれかこれか、ではなく、あれもこれも、1か100かではなく、1から100まで、可能性は無数にあるはずです。それを各自で選択し、教会は出来る限りサポートすればよいのです。

3. 緊急事態宣言に含まれていない人々

さらに、私たちにとっては不要不急の場でも、そこを必要火急の場とする人々は生活の困窮に直面しています。倒産、解雇、内定取り消し、帰国できない留学生や外国人労働者、DV 避難者、様々な場で

生活する権利を奪われた人々がいます。私たちの命を守るために自らの命を犠牲にしている人々を誰が補償するのでしょうか。

今回の新型コロナウイルスは世界中に広まり、特に先進国で多くの死者を出しましたから世界的ニュースとなり、毎日の報道によって恐怖が煽られています。推定致死率は0.66%とされています（インフルエンザは0.1%）。現在は未知のウイルスに対する得体の知れない恐怖に苛まれています。それでもいずれこのウイルスは終息するでしょう。その後の世界はどうなるのでしょうか。2018年の全世界におけるエイズ感染者は3,790万人、死者は77万人でした。2019年の日本国内におけるインフルエンザ感染者は1000万人、死者は3000人でした。交通事故による死者は3215人、自殺者は19,959人でした。しかし、今回のように報道されることはありません。

教会が再び集まり出した時、今回の検証が必要です。今でも未知のウイルスはたくさん生まれており、中には再び流行するものもあるでしょう。教会が次の緊急事態の時どうするか、これを機に備えて行く必要があります。そして、再び原発事故や戦争という緊急事態が訪れたときにはどうするのかも。

2020年3月13日例会奨励「心を知る御方に祈る」 第二歴代誌 6:22-31 須田毅牧師 (JECA 西堀キリスト福音教会)

6章はソロモンの神殿奉獻の祈りと言えます。神殿完成の喜びに満ちて、祈りがささげられるような状況を想像しますが、実際の祈りの内容はそのような想像とは全く異なり、ソロモンの神の御前での謙遜が表されたものです。6章の中間部では、正しいさばきを求める祈り(22-23)、敵に敗北したときの祈り(24-25)、ききん、疫病、敵に遭遇したときの祈り(26-31)が続きます。

最後部分の冒頭に、雨について言われており(26-27)、それも他と同様、神の民の罪との関係で言われます。雨をもたらすのは、天地万物を創造され御手に保持される神様です。そのお方の恵みによって雨はもたらされます。神の民は、創造主との関係を前提に、彼らの生活を左右する天候があることを自覚しています。

雨に続く結果として、ききんがあり、疫病があります(28)。ソロモンは、敵も、また病についても、神の民への災いとして理解しています。これらの災いは突然に人々に降りかかるものでもあります。それをソロモンは、やはり罪と関係あるものとして見えています(30節「赦してください」)。

これらの敵との戦い、突然の災いについて、ソロモンの祈りは同じパターンです。それらを通して罪を知り、主なる神様に対して祈りを聞いていただき、赦してほしいということです。これから約束の地で生じることが予想される、いくつかの事柄は脈絡なく並べられているかのようにも見えますが、ソロモンは神の民の生活全体について、主の權威のもとに歩いていくことを願い、このように祈っているのでしょう。赦しの後には、主がイスラエルに与えたもう約束の地でしっかりと生活することができるように祈っていることから、その願いがあることを理解することができます(25、27、31)。

ソロモンの神殿奉獻の祈りは、神の民イスラエル全体が、全能の神、主の主権の下に生きることを願う祈りです。神殿において御名を置くとおっしゃり、祈りを聞いてくださるお方があることへの信頼ゆえに、ソロモンと神の民は祈るのです。祈りを聞いてくださるお方は、神の民ひとりひとりの心を知ってくださるお方です(30)。ひとりひとりを知ってくださっているという信頼があり、そのお方がおられるから祈るのです。